
梓、誕生日、夜にて

不幸男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梓、誕生日、夜にて

【Nコード】

N4660Y

【作者名】

不幸男

【あらすじ】

中野梓誕生日特別企画です。誕生日前日、いつも以上にいじられたあずにゃんこと中野梓。疲れ果ててベッドへとばたんきゅーしたお話です。夢オチです。夢オチなんです！！（言っちゃった）夢だから何やつてもおくだよね？…といってもそこまですごいことをするわけじゃないです…たぶん。そしてあずにゃん、お誕生日おめでとう。

（前書き）

こんにちは、不幸男です。

あずにゃん、お誕生日おめでとー

1日遅いけど...

「っ、疲れたー」

ここに今日一日の事を思い出しながらベッドにダイブする少女が一人。

名前は中野梓。

高校2年生である。

桜高校軽音部所属。

パートはリズムギター。

ツインテールが特徴的な女の子である。

なぜ彼女がここまで疲れているかと言うといつもベタベタとくっついてくる唯はもちろん他の部員（主に紬と律）までもがやたら部活中に絡んできたからだ。

唯いわく、

「今日はあずにゃん、16歳最後の日なんだよー記念日だよー16歳という日は二度と戻らなくなるんだよー」

だそうだ。

実際は明日が梓の誕生日なので明日が記念日なのだが唯の中では前

日も記念日のうちのに数えられているようである。

もっとも唯にとってみれば毎日が記念日なのかもしれないが…

（うーん。律先輩やムギ先輩はいいとして唯先輩はもう少しどうにかならないかなあ。ひつつかれるのはいやじゃないけどさすがに毎日は疲れるよ…まずは…唯、先輩に…大人になって…もらって…それから…それから…）

結局、考えがまとまらないうちに梓のまぶたは重く閉ざされてしまった。

………

「梓、おい梓ってば！」

「は、はい！」

「なにボーっとしてんだ？」

梓が目を開けると目の前には律がいた。

律は梓が目覚めたことを確認すると再び前を向く。

一体何が起こったのか？

梓は状況がつかめないでいた。

周りの景色を見ても全く見覚えがない。

そして梓は周りを見渡して初めて自分が今、エスカレーターの
の上にいることに気づいた。

（あれ…？なんで私こんなところに居るんだっけ？確か今までベッ
ドの上にいたような…）

2人の周りには見たことも無い機械たちがいそいそと作業を行って
いる。

「いえ。すいません。あの、律先輩、それでどこに向かってるんで
すか？」

「ん、ついてからの楽しみだ！」

正直言つて律がこんな態度をとった時は基本、あんまりお楽しみに
なれない状況下におかれることが多かったので不安で仕方ない梓だ
ったが、律が決して口を割らない事も理解していたので梓は正直に
律のあとをついていった。

ついていった、と言っても地面が勝手に動いてくれるので梓は立っ
ているだけで
よかったのだが。

「おっし、ここだ…！」

扉の前で急に地面が進行をやめた。

「ちよつち、待っててくれよお…おし、完了！」

律が扉の横にあった映画でよく見るパスワードを打つパネルみたいなのに番号を打ち込むと扉はピーっと甲高い音を発し、中へと通し
てくれた。

律と一緒に扉の中へとおそろおそろ入っていくと中には暗闇が広が
っていた。

暗闇。

圧倒的暗闇。

まさに一寸先は闇と言ったところだった。

両方の意味で。

「り、律先輩。ここって何なんですか？そろそろ答えてもらっても
…」

「おっと！それを説明するのは私じゃないぜ！」

「遅かったわね、梓ちゃん」

突然、聞きなれた声がマイク越しで聞こえた。

その声と同時に斜め上方にだけ明かりがつく。

「さ、さわ子先生！？」

前方にある建物らしきものの中に桜高軽音部の顧問であるさわ子の姿があった。

そして彼女はなぜかサングラスをかけ、白い手袋をはめ、どこぞの司令のような格好をしていた。

「待っていたわよ、梓ちゃん。いや初号機パイロット中野梓！」

「へ？」

さわ子はビシッと決めたつもりだろうが梓にはなんの事だか全くわからなかった。

「いい？現在、この町は使徒という存在に襲われているわ」

さわ子が指をならすと梓の目の前に画面が現れた。

「そこに映っているのが使徒よ」

「いや、あの…」

梓が幾ら目を凝らして画面を見てみてもそこには同じクラスの鈴木純の姿しか見当たらなかった。

純はプラモデルのような町を盛大に壊して遊んでいる。

「純しか映ってないんですけど」

「違うわ。それは第三の使徒ジュン・ジュワリエルよ」

「ジュン・ジュワリエル!？」

「そのジュン・ジュワリエルを倒すためにあなたにはエヴァンゲリオン初号機に乗ってもらおうわ」

そう言つてさわ子はもう一度指をならした。

すると部屋が光につつまれてこの部屋の全貌が明らかになる。

まず間違いから正すとそこは部屋ではなかった。

何かを保管しておくための倉庫のようなところだった。

中は梓が考えていたものよりも広く、天井はみえない。

壁にはレールのようなものが走っており真っ直ぐと上の方へのびていた。

まるで何か大きなものを運ぶために、いや何か大きなものを発進させるために。

そしてきつとその何かに当たるであろうものがそのレールにつながれていた。

ここの物は一度も見たことがないような物ばかりだったがその者だけは違った。

「これって唯先輩じゃないですか!?!」

「違うわ、それはエヴァンゲリオン初号機よ。私が心血注いで作り上げた最高傑作である、ね」

「大体、なんでこんな巨大化してるんですか？意味が分かりません！」

「さあ、梓ちゃん。この唯ちゃ、初号機に乗ってジュンジュワーを倒しに行くのよ！！！」

「行きません！！それに今、絶対唯ちゃんって言いましたよね！！あと使徒の名前変わってます！」

「いちいち細かいところばかり気にするわね…行くの？行かないの？」

「だから行きません！なんで私が行かなきゃいけないんですか！！」

「ん…しょうがないわね…ムギちゃん、彼女を」

さわ子は横にある画面に話しかける。

すると画面の向こうに紬の姿が現れた。

「出せますかね、先生」

「死んでいるわけではないわ」

しばらく間、梓がさわ子に文句を言っていると一人の少女が寝台に乘せられ運び込まれてきた。

適合者がなかなか見つからなくてな。ようやく見つかったのが梓
お前なんだ」

「でも…」

「大丈夫。お前なら出来る!!」

「でも私こんな見たことも聞いたこともないですし、出来るわけ
ないです!!」

「じゃあこのまま!! 漣が苦しみながらも初号機に乗ることが一番
いいことだと思うのか？」

「それは… 思い、ませんが」

「お前に今できることは何か、何をやらなくちゃいけないのか、も
う一度考えるんだ」

このままでは漣がもつと苦しむのは紛れもない事実…

私が初号機に乗れば漣先輩が苦しまなくて済むのもわかってる。

（そんな簡単なことわかってるのになんで… なんで私はためらって
るんだ!! いつもの私なら絶対漣先輩を苦しませたりしない!! 戻
ってこい!! いつもの私!!）

カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私
カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私
カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私

カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私
カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私
カムバック私カムバック私

「私、乗ります！！乗らせてください！！」

「あ、そう？乗ってくれる？はいじゃあ、澪ちゃん、は病室に戻していいわよ」

さわ子が撤収の号令を出すすぐさま寝台は病室へと戻っていった。

「よし、梓。これを着るんだ」

律が梓に布の塊を手渡す。

「なんです？これ……メイド服みたいですけど」

「それはプラグスーツと言ってな、初号機とのシンクロを補助してくれるんだ」

「じゃあこれはなんですか？猫耳みたいなんですけど……」

「それはインターフェイス・ヘッドセットといっ
てな初号機との神
経接続に欠かせないアイテムなんだ」

とりあえず更衣室に通され、素直に着替える梓。

「あの…着替えたんですけどこれって猫耳メイドですよね？」

着替え終わってさっきの場所に戻るとさわ子と律が待っていた。

「そうともいうな」

「うん！！完璧よ！！よくぞここまでの適合者を連れてきたわね！」

鼻息荒く興奮気味のさわ子。

「さわちゃん、私をなめてもらっちゃあー困る！！梓は下手したら溼よりも猫耳が似合うかもしれないという私の見たては完璧だったぜ！！」

得意げに語る律のおでこはいつも以上に輝いているようだった。

「それにしてもすごいシンクロ率ですね、さわ子先生。これならどこに出してもOKですね」

いつのまにか現れた紬が会話に参加する。

「そうね！！それじゃあ、梓ちゃん。まず猫のポーズでニヤーてやってみて」

「にゃ、にゃあー」

「完璧よ！！私が教えることはもうないわ！！」

「な、なんなんですか、これ」

「何って、猫耳メイドだけど？」

「だから！！！！なんで猫耳メイドなんですか！！！」

「それは…猫耳メイドだからよ！！！」

「私はそんなしょうもない答えを期待していたわけではありません！！！」

「だったらなんなのよー」

「なんで初号機に乗るのにこんなひらひらの服で、しかも猫耳で乗らなきゃいけないんですか！！！」

「だって可愛い方がいいじゃない！」

「それはそうですけど、私は恥ずかしいです！！！」

通常のメイド服より明らかに丈の短いスカートに手を押しあて激昂する梓。

「ちなみに初号機での戦闘時は中の梓ちゃんの姿は360度、全方向からのカメラでモニタリングされ全世界に配信されるわ」

「いやです！！やっぱり私、絶対乗りません！！！」

「そんなこと言っていていいと思っているの？」

「私たちがそれを許すとも？」

「ごめんね梓ちゃん」

三人がじりじりと梓に詰め寄る。

「ちょ、先輩がた？顔が怖いですよ…？」

「りっちゃん、ムギちゃん！！梓ちゃんをとらえなさい！！」

「あいあいさー」

「ちょ、ちゃつと！！うああああああ」

ガタンとベッドから落ちる梓。

時計を見る。

時刻は11月11日6時半。

いつもより少し早い起床だった。

「ゆ、夢かあ…」

17歳初めての朝の気分は最悪だった。

今日は厄日だな

そんな事を思いながら梓は学校へ行く準備を始めた。

しかし彼女はまだ知らない。

部室で唯たちが梓の誕生日会を盛大に開いてくれる事を。

そして誕生日プレゼントと称してさわ子が猫耳メイドの衣装を作っている事を。

（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

実は初短編です。

短くまとめるのって難しいですね…

しかしあずにゃんのためならえんやこーらーという勢いで書きました。

そして実は私は唯ちゃん派です。

よかったら他の作品も読んでいただけると嬉しいです。（宣伝）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4660y/>

梓、誕生日、夜にて

2011年11月17日17時32分発行